

編集後記

『社会科学年報』第44号をお届けします。本号もまた、現役の所員と並んで多くの研究参与の方が執筆されています。その中でも、巻頭論文をお寄せいただいた儀我壮一郎先生が昨年12月に急逝されたことを痛恨の出来事としてお伝えしなければなりません。

今号の儀我先生の論文「張学良少帥と日本」は、前号（第43号）の「張作霖大元帥と日本」と一対になっています。さらに、前々号（第42号）の「張作霖爆殺事件の真相」とも連動しています。これらの既発表論文と合わせてお読みいただければ幸いです。

かつて儀我先生の御父君の儀我誠也氏（当時陸軍少佐）が、軍事顧問として張作霖と同じ車輦に乗車していたために、河本大作大佐を首謀者とする列車爆破のさいに九死に一生を得たという経緯があったことから、この問題は儀我先生の終生のテーマとなっていたように思われます。

近年に書かれた、入手しやすい連載エッセーでも、この問題が最終回で取り上げられています。

月刊誌『経済』（新日本出版社）に、2006年9月号から2007年12月号まで（2007年5月号を除いて）15回に渡る「研究余話」が以下のように連載されています。①断想・日中関係史の光と影、②異論・正論 徐福伝説、③厚遇・冷遇 鑑真大和上と政治、④揺らぐか否か 歴史の原点、⑤意外・心外 女性と天皇制、⑥毒か薬か 陰謀か希望か 正倉院薬物の謎、⑦親日と 抗日と 魯迅のなかの日本（上）、⑧親日と 抗日と 魯迅のなかの日本（下）、⑨作品と実生活 魯迅のなかの周樹人、⑩日中友好の諸側面 河上肇と近い中国、⑪驚天動地の大

逆転 歴史と地理の変動、⑫地理と歴史の諸問題 国と戦争の名称、⑬日本の科学者の決意 平和と福祉の学会へ、⑭米国医療は危機的状況 日本医療の進路は？、⑮張作霖爆殺と西安事件 張作霖・張学良と日本

なお、上記連載エッセーの第2回「異論・正論 徐福伝説」では、秦の始皇帝の時代の日本への渡来集団である徐福集団を日中友好の源流として紹介されていますが、その中では、本年報の今回の儀我論文（遺稿）の校正をいただいた壺岐一郎氏（現代史を考える会・日本記者クラブ会員）の著作『徐福集団渡来と古代日本』（三一書房、1996年）からの引用も数か所あります。

儀我先生は、東京帝国大学経済学部・大河内一男ゼミで社会政策・人口論を専攻されました。そして、大阪市立大学商学部を定年退職後、専修大学経営学部に移って来られました。また、その後に浜松大学にも行かれています。その間に、学術会議会員（第9期から第12期まで）も務められています。企業形態論を軸にしながら、中国研究や医療・薬品研究などを行われてきました。

本社会科学研究所（以下、社研と略す）は、敗戦後、東大教授との兼任であった専修大学大河内一男学長（1946年4月専修大学経済学部長、同学長1947年12月～1949年3月）が退任後に学監となっていたときに設立され、大河内一男氏がその初代所長となりました。こうした経緯から、儀我先生は社研には特別な親近感を持たれていました。1985年から89年までは運営委員、90年からは研究参与として社研に関わってこられました。

春期や夏期の国内外の実態調査、特に海外の

実態調査には毎回のように元気に参加されていましたが、昨年3月の韓国での実態調査が最後の参加となりました。そして、そのたびに、社研の月報（実態調査特集号）に寄稿されていました。

社研は社研創立60周年記念事業の一つとして、10月24日（土）に神田校舎で第2回檀国大学・専修大学合同研究会を開催しましたが、その懇親会にも儀我先生は参加されていました。韓国側の参加者がその姿を見て、日本ではこんな高齢の方も気軽に熱心に研究会に参加されるのかと感動していました。常に温厚で、飾らない人柄、そしてその健脚と健筆は特筆すべきことで、こうした人間国宝のような存在に惹かれたのでしょう。

また、昨年11月22日（日）・23日（月）には、東大経済学部で経済理論学会第57回大会が開催されましたが、これもちょうど創立50周年の記念大会でした。儀我先生は、1日目の午前中の分科会で「大転換期の多国籍製薬企業」を報

告されました。同じ分科会で、その次に報告された八尾信光氏（鹿児島国際大学）は大阪市立大学の修士課程のときに儀我先生の指導を受けていた方ですが、分科会終了後、編集子はこのお二人といっしょに東大の時計台の地下食堂に行き、長い行列に並んだ事を思い出します。

最後に、社研の月報の500号発刊記念号（2005年2月号）に、儀我先生が「『専修大学社会科学研究所月報』は不滅です」という小文を寄せられていることを紹介させていただきます。ここには、おそらく社研全体が「不滅です」というメッセージが込められているのではないのでしょうか。この小文の結びの一文を次に挙げておきます。

「毎号待ち遠しい『月報』のますますの充実と、理論的・現実的な指導的役割の発揮を、切望してやみません。」

この期待に応えるべく、社研関係者一同が今後いっそう健脚と健筆に励まれることを懇請いたします。 (T.F.)